

中学校の部 最優秀賞

「PEACEへの道」

埼玉県蕨市立東中学校 2年  
松本 綾香 (まつもと あやか)

「何かをなくしたときは、何かを得るときだ。」

この言葉が最も心に深く刻まれた。自分の宝物である懐中時計を盗まれてしまったのにも関わらず、悔しい気持ちを心に秘めて娘をなだめる父、進示の姿に感動した。

一瞬で広島を火の世界へと導いていった、「原子爆弾」。この話を読んで、戦争の恐ろしさを改めて身に染みて感じさせられた。同じ日本人なのに、この「原爆」の恐ろしさをよく分かっていなかった自分が恥ずかしく思えた。

「原爆」の恐ろしさに驚かされたが、それに立ち向かう人々の行動は、さらに驚くべきことだった。日本で、いや、世界で誰もその怖さを知らないのに、前に向かって進んでいる人がいるのは、信じられないことだ。

本文で、「原爆による痛みを負け、道に横たわる人々」の姿も描かれていた。もし自分がその時代に生きていたとすれば、間違いなく、「痛みを負け、横たわる人」の一人だったと思う。

被爆した人々の表面的な傷は消えても、心の傷は一生残る。大切な人、物をなくしたとき、人々はどう思うのだろうか。こんなひどい惨事を起こして、何か得をしたことでもあるのか。戦争は人類の恥である。

私は、この本を読んだことをきっかけに、戦争や原爆に関するテレビ番組などを観るようになった。人々の行動を制限してまで、人々の夢をむしばんでまで、戦争をする必要ははたしてあったのだろうか。疑問に思えることがたくさんあった。

また、本文で原爆投下直後に「広島に原爆が落とされた」ということを知らなかった人がいた、ということも不思議だった。今の日本はちょっとしたことですぐにニュースになり、その情報が一瞬にして全国を駆け巡るからだ。それも、「戦勝」のための一環として、情報を制限されてしまっていたからなのだろうか。そう考えると、ますます悲慘に思えてくる。

今年は、戦後七十年という、歴史の中でも大きな節目の年である。つまり、ここからいわゆる「スタート地点」であり、始まったばかりだ。今後「戦争をしない」ことも大切だが、私は「個々の夢を傷付けない、皆が幸せな未来」であってほしいと思う。夢を壊し、大切な人を奪い去っていく戦争は、いかなることがあってもしてはいけない。そう強く感じた。

「広島」が「ヒロシマ」になった時。人々は未来を失ってしまった。しかし、ここからである。失敗を、成功に変えるために、まず自分が何をしなくてはならないのか、何をしてはいけないのかをじっくり考えようと思った。

「何かをなくしたときは、何かを得る時だ。」この言葉を常に心の片隅において、平和のために、世界に貢献できる人間でいたい。